

## 論 説

## 「あの日、あの時」と「これから」

佐々木 力也

## 要 旨

東日本大震災から10年が経とうとしている。筆者は、当時、田老第一中学校に勤務していた。本稿では、様々な記録資料と記憶を基に、地震発生時から田老総合事務所に避難し翌朝を迎えるまでの行動について述べ、当時の学校や生徒の状況を「その日、あの時」として振り返りたい。また、写真や職員会議資料や報告資料を基に、平成23年度から平成24年度の学校経営方針についても述べながら、田老第一中学校の復興教育の実践内容について紹介する。

さらに、いわての復興教育を教育の根幹としてとらえ、人づくりをねがいと「これから」の防災教育や教員研修の在り方について提案する。記述する全ての内容は筆者の自省とこれからの教育を展望することをねらいとしており、一つ一つの実践記録や提案等について、多方面から多くのご批正と議論を求めたい。

キーワード：あの日を振り返る 学校経営 復興教育 記録と記憶 ねがいとねらい

## 1. はじめに

2011年3月12日(土)、5時30分、避難先の田老総合事務所3階から撮影した一枚が写真1である。



写真1 2011年3月12日5時30頃の田老町(撮影者:筆者)

徹夜明けの冴えない頭で翌日の朝を迎えた。白々と明ける早朝、はっと息を呑む田老の町の姿は「無常の雪」で覆われていた。冷気と霊気が混同するかのような青白い光を放ち、「津波の後には雪が降る」という言い伝え通りの光景が目の前に広がっていた。

震災で亡くなった人たちの死因のほとんどは溺死である。しかし、津波の襲来で怯え、瓦礫の下に埋もれたまま寒さで凍えて亡くなった人がいるとすれば、まさしく「無情の雪」である。多くのこ

とが頭を過った。大きな震災になってしまったということ、生徒のこと、保護者のこと、学校のこと等がとても心配になった。「しっかりしなければならない。」と自分に言い聞かせた。今日の卒業式はできない。まずは、朝から保護者が迎えに来ることへしっかりと対応していかなければならない、そう鼓舞した。

以下、今後の防災や復興教育を考えていくための情報提供並びに自省を目的に「あの日、あの時」を生資料を提示し、時系列に沿いながら正確に振り返りたい。そして、展望を目的に「これから」の防災や復興教育等に対する思いを綴りたいと思う。

## 2. 「あの日、あの時」を振り返る

## 2.1 地震発生時から避難までを振り返る

東日本大震災の地震発生時から避難するまでの概要を表1で記す。

表1 3月11日(金)の行動を振り返る

【14:46】	東日本大震災地震発生、6校時目の授業中であった。(翌日は卒業式の予定)
【14:50】	校庭に避難完了(在籍129名中7名欠席、122名の安否確認)情報得られず校庭で待機、余震もあることから15:30まで校庭で待機の指示をする。

【15:10】 田老湾方向に水柱（煙のように立つ噴水で高さ 30 m 以上にも舞い上がった）を発見、用務員の琴畑さんが「津波だ、逃げろ！」の発声で裏山（赤沼山）を目指し走る。生徒、教員、住民は崖を這いつくばりながら山を登る。（常運寺の墓地を目指して避難）→生徒の安否を確認するが生徒数が足りないことが分かり、捜索に被災した校舎に戻る。→別ルートで避難した何人かの男子生徒と教員がいて、当日登校していた 122 名の生徒と全教員を確認するまで 1 時間以上を要す。

【16:30】 田老総合事務所の指示により、役場 3 階に避難した。

【19:00】 校長は、生徒に 5 つのことを話した。

- (1) マグニチュード 8.8 の大きな地震があった。町全体が壊滅状態になっていること。
- (2) 今晚は、役場の指示があり、全員で、ここに泊まり避難すること。
- (3) 田老がまた大きな被害に遭った。この危機を乗り越えるのは、君たちの強い心とチームワークであること。
- (4) 住民の皆さんも避難している。迷惑がかからないようお願いしたいこと。
- (5) 体調が悪い人、心配なことがある人、先生に相談したい人がいれば、躊躇しないで話すこと。

数家族の人たちが生徒を迎えに来たが、全員で一夜を明かすことを説明し、明朝を迎えに来てほしいことをお願いした。その晩は、5 人に 1 つの毛布、3 人に 1 つのおにぎりの配給があった。夜中の余震が続き、全員が棒状になって横になり、仮眠を取りながら一夜を過ごす。

以上、地震発生時から田老総合事務所に避難し一夜を過ごすまでのことを時系列で簡単にまとめたが、以下、重要な情報を付記する。

震災当日の地震発生時は、6 校時目の授業の最中だった。翌日は、卒業式を予定していた。午後 2 時 46 分発生の長い地震に驚きと焦りを感じながら校長室から外に飛び出し、用務員の琴畑さんと一緒に、1 階にいた 3 年生に対し「外に出なさい。」と叫んだ。日頃の避難訓練の成果もあり約 4

分で校庭に避難することができた。体育館で、卒業式の練習をしていた 1、2 年生も校庭に迅速に避難することができた。

ラジオの情報や防災無線だけが判断の頼りであったが、正直、その後の判断と指示の難しさを痛感した。判断を迷わせた理由は、防災無線の声不明瞭であった。明治 29 年、昭和 8 年の三陸大津波に遭っても本校が被災から免れ、平成 17 年度から本校が津波シェルターになっていることや防浪堤の存在があったからだ。

「津波はここまでは来ない。」そう思った。「まずは、3 時 10 分まで待とう。」しかし、余震が何度かあり、最終的に「3 時 30 分まで待機し、様子を見よう。」と伝えた。

その時、3 時 10 分過ぎ頃、田老湾方向に 30 メートル以上の高さの（後々思い出せば 100 m にも達していたと思う）、まさに東京スカイツリーのようにそびえ立つ水柱を発見した。用務員の琴畑さんが、すかさず「津波だ、逃げろ！」と、声を発したことが避難行動の引き金となり、生徒も教職員も一斉に高台を目指して懸命に走った。校庭に避難していた田老の住民や保育園の園児たちも、田老一中の行動を見て、一斉に動き始めた。そして、四つん這いになりながらも必死に赤沼山を登り切り、常運寺の墓地に避難した。

常運寺の墓地で人数確認をした。欠席は 7 名、全校生徒は 129 名なので、122 名の生徒がいるはずだった。しかし、学級・学年ごとに人数確認をした結果、人数が足りない。愕然とした。

そこで、何人かの生徒が別ルートで避難した可能性がある判断し、若手男性教員とともに捜索にあたった。

険しい山を大きく迂回して校舎裏へたどり着いた。30 分要した。

私はすでに被災している校舎へ入り、写真 2 にあるような新しい手帳とデジタルカメラと平成 22 年度生徒名簿と筆記用具等を持ち帰った。3 名の若手教員は、生徒の捜索にあたった。

生徒全員の安否を確認し、全員が無事であることを確認できるまで 1 時間以上も要した。



写真2 校長室から持ち出した実物(撮影：筆者)

その理由は、「津波だ。逃げろ。」の声で一斉に避難を始めたが、何人かの生徒は、機転を利かせ、体育館の裏手から三鉄の線路を通り田老第一小学校方面へ避難したからだった。日頃から、学校周辺の地理に明るい生徒たちは、冷静に校舎周辺の状況を判断し、主体的に行動することで津波から自分の命を守ったのだ。当初、常運寺で人数の確認をした時には、焦りの色を隠せなかった。最終的に全員が無事であることがわかり、とても安堵したことは言うまでもない。

特筆したいことは、生徒が見せたたくましい行動力、その強さと優しさ溢れる姿だ。山を登った生徒や若手教員がとった行動について記載したい。常運寺までたどり着くまでには、全ての生徒、住民の皆さんは大変苦勞したと思う。振り返り眼下を見下ろせば、津波が瓦礫を食って、少しずつ校庭を埋め尽くす様が迫る中、必死になって赤沼山を登った。その中にあっても、何人かの生徒や若手教員は、たくさんの保育園児やお年寄りの手を繋いだり、恐怖で足がすくみ歩行がままならない人たちを背負ったりしながら、安全なところまで誘導していた。

また、後日の報告で得た情報では、体育館の裏手から避難した生徒たちは、周辺の土地が不案内な住民の方々を「三鉄の線路をたどっていけば一小に通じます。」と避難誘導したそうだ。田老一中の生徒の主体的に行動するたくましさや優しさ、たのもしさを感じた。

すでに校庭はがれきに覆い尽くされていた。4時30分には、田老支所から3階大会議室に避難するよう指示があった。

## 2.2. 3月12日(土)の行動を振り返る

地震と津波により総合庁舎支所に避難し一夜を過ごした翌日の行動を(表2)で示す。

高橋副校長には、地震のこと、学校や生徒のこと等のあらゆることを校長室から持ってきた真新しいノートに記録するようお願いした。

表2 3月12日(土)の行動を振り返る

【7:00】	早朝から午後にかけて保護者に生徒の引き渡しを開始した。欠席生徒7名も午後には無事であることを確認する。
【16:00】	教職員は常運寺で解散する。(15日正午に学校に集合確認) 田老総合事務所に残ったのは生徒約10名と校長・副校長であった。

翌朝から、保護者や親族が生徒を迎えに来た。そのことも写真3にあるように詳細を記録するようお願いした。

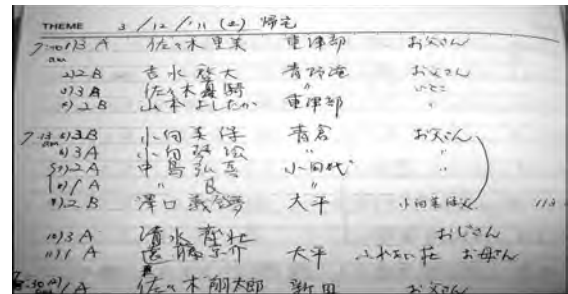


写真3 記録ノートの一部(撮影：筆者)

最後は、10名余りの生徒が残った。先生方は、常運寺で、午後4時頃に解散し、15日の正午に、田老第一中学校に集合することとした。宮古市内から来ている先生方は、三陸鉄道線路の約12キロ以上の暗い道のりを4,5時間かけて帰って行った。

## 2.3 ボランティア活動に汗する生徒たち

震災直後から、写真4にあるように、スタッフジャンパーを着て支援物資を運搬する等のボランティア活動を続けた数多くの生徒たちがいた。自分の家屋が被災したにもかかわらず、前向きに田



老の復興のため、厳しい寒さの中、ボランティア活動に果敢に取り組む姿を見て、田老一中の生徒を誇りに思ったことは私だけではなかったと思う。



写真4 三陸鉄道で支援物資を運ぶ生徒たち  
(撮影日：2011年3月16日、撮影者：筆者)

彼らは被災地被災校の生徒たちではあるが、過酷な学校生活や地域の生活現実の中にあっても自分の持てる力を十分に発揮し、田老の復興に寄与し、心身ともに大きな成長を遂げようとしていた。

## 2.4 卒業式挙行

宮古市では、卒業式の日時は各学校に一任された。本校は、県立高等学校の合格発表日と同日開催とした。大切な卒業式について本校の行事日程等を記したポスターを作成し、避難所や役場等に掲示し住民に周知した。

表3 3月24日(木)の行動を振り返る

<p>【10：00】高校合格通知書配布(全員合格) 【11：00】3階多目的教室で卒業式を挙行する。 (全校生徒、卒業生の保護者出席、来賓なし)</p>
--

当初は、避難した田老総合事務所で卒業式を行う予定だった。しかし、先生方は、被災したままの校舎ではあるが、3年間の学び舎で行いたいと希望した。教室や廊下には未だに被災した残骸が残っていた。生徒玄関の1階から卒業式会場の3階までの廊下にブルーシートを敷いた。

卒業生は全員、高校入試の合格通知書も手に入れていた。写真5は式後に撮影した一枚である。

ジャージ姿で参加せざるを得なかった生徒の生活現実を思うと胸が締め付けられる。



写真5 卒業式後の集合写真(撮影者：筆者)

## 3. 平成23年度の学校経営方針と直後の対応

平成22年度卒業式を無事に終えた。被災した校舎や校庭は当分の間は使えない状況下にあっても学校教育は進めていかなければならない。本校は、宮古市の方針に基づき4月25日に入学式と始業式を行った。隣接する田老第一小学校を間借りし生徒131名で新年度を迎えた。年度当初から生徒の心身の状況を理解し心のケアに努めた。しかし、器物破損等の生徒指導事案が絶えない状況となっていた。修復途上ではあったが、可能な限り早く中学校に戻りたいと願った。そして、関係各位のご配慮を受け、9月21日に本校舎に戻ることができた。

### 3.1 平成23年度の学校経営方針の概要

平成23年度の学校経営方針は急遽変更し、実情に最大限対応するものとし、次のように4月1日の職員会議で下記の2つの基本方針について提案した。

- (1) 生徒や家庭の生活現実を十分に理解し、教育活動やPTA活動を行うこと。
- (2) 田老や岩手の復興のため、明るい未来を展望し努力することができる生徒を育成すること。

また、具体的な内容(案)として次のようなものを示した。

- ・復興の力を養うための基礎学力の重視
- ・ボランティア活動・奉仕活動の重視(週1回程度、グリーンピアで行う活動の試行)

- ・規範意識を持ち、社会のルールや法を遵守しながら生活をさせるための生活指導の重視
- ・避難訓練：新避難経路の設定と避難訓練の実施（宮古市教育委員会、岩手大学、田老第一小学校との連携）
- ・津波の歴史（過去）・田老の現状（現在）・未来の街づくり（未来）に関わる講話（5月～7月、宮古市市役所 山崎正幸氏）
- ・西根第一中学校（八幡平市）との生徒間交流（9月実施予定、部活動交流と宿泊研修）
- ・5月6日までは5時間授業、9日からは通常の日程（月・木：5時間 火・水・金：6時間）
- ・PTA 会費は徴収しないこと。
- ・学校行事の見直し（特に、体育祭、文化祭、修学旅行は検討する）

### 3.2 文部科学省の視察への対応

平成23年6月9日に文部科学省文教科学委員会の委員12名の視察があった。これに備え、発表資料（【資料1】参照）を作成し、下記①～③について説明した。

- ① 震災から現在までの状況
- ② 防災教育について
- ③ 震災加配の状況

①については、既に要保護と準要保護生徒20名が認定されていたが、震災後にはさらに66名の申請があり、全校生徒131名中、66%に当たる86名の生徒が何らかの経済援助を受けていること等について説明した。委員には、生徒を取り巻く生活状況を理解し心のケアに十分に配慮しなければならないことを伝えた。そして、必要な支援をいただきたいことをお願いした。

②については、付記し端的に思いを述べた。まず、地震、津波と火災を想定して年2回の避難訓練を実施していることや、今回の地震の後、約4分という短い時間で校庭に避難できたのは訓練の成果であることを説明した。また、資料に、防災教育を義務化・必修化するべきであることを明記した。教員研修の必要性等、学習指導要領へ明確に盛り込むことが必須であると考えた。

さらに、2010年9月には、昭和三陸大津波を

体験している田畑ヨシさんの「津波てんでんこ」についての紙芝居（つなみ）を聞き、地域の伝承を学ぶとともに、防災意識を高めた実践について説明した。「てんでんこ」という言葉の意味についても述べた。（「津波が来たならば、肉親に構わず各自でんでんばらばらになっても一人で高台へ逃げなさいという意味で、三陸地方の津波防災の言い伝えになっている。」）

最後に、今回の経験を風化させずに語り継いで、自分の命をしっかりと守ることができる力を身に付け、田老のため宮古のため、岩手の未来を展望して努力できる生徒を育てたい、というねがいを力説した。

## 4. 平成24年度学校経営方針と復興教育

平成23年9月中旬までは間借り生活を余儀なくされ、生徒指導対策や生徒の心のケアに追われる日々が続いた。しかし、日程を変更しながらも体育祭や修学旅行等の学校行事の実施に力を注いだ。平成24年度は、新たな学校体制の下、復興教育を本格的に進めたいと考え、復興教育の理念である「ひとづくり」に向けた教育活動を積極的に展開しようと考えた。そして、震災関連の表現活動としての文集作成、総合的な学習の時間での見学活動、横軸連携による交流活動（盛岡市内の5中学校と田老第一中学校が連携した復興教育活動）等を実施した。

### 4.1 平成24年度11の学校経営方針

平成23年度の学校経営は、生徒を取り巻く環境等の変化に伴う生徒状況に対応するため十分に行うことができなかつたと振り返ることができる。平成24年度は、前年度の反省を元に、「震災の記録」と「命の教育活動」の2点を教育活動の重点として掲げ、下記①～⑪までの具体的な教育活動を進めていった。

- ①学力向上について：基礎学力の定着に向けた指導改善
- ②キャリア教育：各学年の総合的な学習の時間の充実、修学旅行や宿泊研修での職場体験や職場

## 訪問

- ③防災教育：避難訓練、防災講話、震災の記録
- ④健康教育・心のケア：各生徒の心身の状況把握と教育相談の充実、心のファイルを活用した支援
- ⑤道徳教育：ねらいに即した道徳の時間の充実、規範意識の醸成、各教育活動との関連
- ⑥ボランティア教育：校舎内外の清掃活動の充実、仮設住宅等での奉仕作業、資源回収
- ⑦地域への支援(交流)：仮設住宅での活動、保育園やグリーンピア内サポートセンターや高齢者施設の訪問
- ⑧学校間交流：盛岡市内中学校との交流、部活動や生徒会活動等の交流
- ⑨教育指導の充実：学力の保障、読書指導、学習指導要領に即した教育活動
- ⑩震災関連の表現活動：作文の文集化、震災の記録と発信、通信(学年通信等)の発行
- ⑪各主連携：小中高間の連携、特別支援学級と通常学級間の交流学級の推進

これらは4月当初の提案内容であり、全ての項目を着実に実現できたとは言えない。しかし、常に大きなねがいをもち、一つ一つの活動のねらいを明確にしながらかも前進することが大切であった。その中で、上記した⑩の「震災関連の表現活動」を優先課題とし、意図的・計画的に推進した。以下、最初の提案内容から作文集が完成するまでの過程について記述する。

## 4.2 生徒作文集「いのち」の発行

### 4.2.1 生徒作文集発行の最初の提案

平成23年度末(平成24年3月2日)に、全生徒が震災関連の作文を書くことを国語の授業の中で行ってもらうことを提案した。提案文書の骨子は次のようなものである。

「東日本大震災のような心に衝撃を与えた体験の後、半年・一年といった節目の時期に学校で行う記念行事や追悼式典等は、生徒や教職員が精神的に回復していく過程において、重要な役割を果たします。そのような行事は、人と話をすることはまた違った様々な方法で、感情を表に出す機

会を与えてくれます。また、学校での記念行事は、深い悲しみの時期に一度区切りをつけて、通常の学校生活へ戻るきっかけを与えてくれます。

そして、この機会に「これまででできたこと」「助け合ったこと」「学んだことや気付いたこと」等に焦点を当て、これまでの1年間を振り返ってみることを大切にしたいと考えます。

実施にあたっては、様々な行事が精神的に回復に役立つ度合いは人によって異なり、感情の表現方法も違うことから、大きなイベントをひとつだけ実施することよりも、様々な行事をいくつか行い、幅広い感情の表現の機会を提供することが重要であると考えます。加えて、震災から一定の期間がたっても、生徒の生活現実の状況から、気持ちを整理して前向きになることは容易ではないこともあるかもしれません。こうした場合は、追悼行事に集まることや震災関連の表現活動の記録と発信活動を通して、人々が感情や不安を共有し孤独感や無力感を弱めることが非常に重要です。いずれ、震災から1年を迎えるにあたって、学校教育の一環として、震災にかかる様々な表現活動を実施することを通して、大震災から精神的に回復し、悲しみや不安を常に脇にかかえながらも岩手の復興に向けた意識や意欲を高め、これからの人生を前向きに歩んでいく力を育てていきたい。」

作文指導を進めるにあたって、2名の国語科教員にお願いした。しかし、卒業式や高校入試も近づいていたため、出来上がった内容に格差が生じ期待していたような作文には至らなかった。

### 4.2.2 平成24年度、生徒作文集の再提案

新しい年度に、改めて全職員に対し表現活動の意義について提案しようと決意した。どうしても作文を残したいという気持ちは変わらなかった。6月に次のように文書提案した。表題を「震災関連の表現活動の一環として書かせた生徒作文の出版について」とし、ねらいを次のように記した。

「震災から1年以上経過し、学校教育の一環として、震災にかかる様々な表現活動を実施することは、大震災から精神的に回復し、悲しみや不安



を常に脇にかかえながらも岩手や宮古の復興に向けた意識や意欲を高め、これからの人生を前向きに歩いていく力を育てていく大きな原動力となる。

表現活動の一環として行う生徒が書いた作文を文集や出版物にし、多くの人に（将来の家族や地域）伝え続けることができれば、震災体験や教訓は風化しないことに加え、田老地区の防災教育や復興に向けた活力を生む貴重な資料ともなり、生徒自らが自他の生命を守り復興に向けた生きる力を育むことができると確信する。」

全職員にねらいを理解してもらい、組織的な取り組みを通して円滑に進めていくためには、活動を支える理論や指導上の留意点等についての共通理解が必要であった。生徒の心のケアにも十分に配慮しなければならないからだ。表現活動を展開する場面では、時々の生徒の心の有り様をなによりも心配したからである。それは、何年経とうとも、震災の深い悲しみや記憶を消し去り忘れることはできないからである。

筆者には漠然とした自信はあったが、微かな不安や危惧の念が常にあった。作文には大きな意義があるという思いの対局には生徒に余計なストレスをかけてしまうのではないかと案ずる思いが入り交じり、常にプラス面とマイナス面が頭を擡げた。職員会議での説明時においても、取り組みが軌道に乗った時期においても悩みは尽きなかった。

しかし、以下に述べる様々な立場にいる方々から力強いメッセージやメールをいただき、表現活動を進めることに対して後押ししていただいた。

荒谷アイさんからのメッセージを紹介する。アイさんから「作文はいつか役に立つ」との言葉をいただいた。

アイさんとの出会いは、2010年9月14日に実施した田老一中と岩手大学との合同授業<sup>1)</sup>の時であった。授業の前半、生徒と学生が田畑ヨシさん<sup>2)</sup>の津波体験紙芝居(つなみ)を拝聴した。後半は、学生が荒谷さん宅を訪問し、昭和三陸大津波のことを聞く現地実習を実施した。筆者も同行し訪問の機会を得たことが、アイさんとの初めての

対面となった。アイさんは2017年1月にご逝去されたが、筆者が投稿した追悼の言葉を岩手日報の「日報論壇」に掲載していただいたので、一部を記載する。

『荒谷アイさんは、小学校五年生の時、昭和八年の三陸大津波に遭った。そして、担任訓導の佐々木耕助先生から「ありのままを作文に書け。」と指導され、「津波」という題で、作文を綴った。吉村昭著『三陸海岸大津波』や田老尋常高等小学校が昭和9年に発行した「田老村津浪誌」にも記載されている。作文は、「私は、ほんとうに独りぼっちの児になったのです。」で終わっている。復興教育において、子ども達一人一人のいのちを大切に、健やかな心と体を育み、安心して生活することができるよう、教育活動の充実を図っていかねばならない。そして、保護者や地域の方々の協力を得ながら、子ども達にとって、より安全安心な環境作りのため、全力を注いでいかねばならない。講演の最後にいただいたアイさんのメッセージはこうだった。「いのちの一つしかありません。だから、いのちを輝かせ、素敵な人生を送ってください。」95歳の人生の幕を閉じたアイさんから学んだことは計り知れない。』

山崎友子先生（岩手大学名誉教授、災害文化研究会代表世話人）からは、作文集「いのち」の発刊に関わり全面的にご支援ご指導をしていただいた。

6月、表現活動の理論や指導上の留意点等について山崎友子先生からメールをいただき、教職員に提示した内容を【資料2】に掲載する。その中でも、9つの教育的な意義並びに心理学的知見の内容は説得力がある。また、荒谷アイさんの学級担任であった佐々木耕助先生との信頼関係の上に立った作文指導があったこと等も参考になった。

提案時期以前から既に表現活動の指導を軌道に乗せていた学級担任の先生方もいた。既に卒業していた平成23年度卒業生48名の作文の集約については副校長にお任せした。

#### 4.2.3 表現活動についての始業式式辞

猛暑続きの夏休みであった。8月17日の始業

式では、生徒全員の出席の下、表現活動の意義を中心に次のような式辞を述べた。

「夏休み期間中は、陸上練習、部活動、部活動交流会、31日の篠塚野球教室、3年生は早朝からの学習会、地域的には11日に行われた「夢灯り」がありました。「追悼念と復興への願い」が込められた夢灯りが防浪堤などに並べられ、追悼の気持ちを持ったと思いますし、将来を見据え、新たな決意を持ったと思います。

そして、震災から1年5か月以上もたった今、田老一中の生徒の皆さんも、必至に歩みを進めてきた道のりを振り返り、2学期をまた新たな気持ちで、常に前向きに活動を進めていく必要があります。

1学期、学習面、部活動の面で、田老一中が持っている力を様々な形で表現し、多くの成果を残すことができました。しかし、結果以上に大切なのは、何かを取り組む過程であり、活動に取り組む姿勢や活動に込められた意義を理解し、一つ一つの活動に魂を込め丁寧に行っていくことだと思います。決して、活動が楽しそうだからとか、気軽に手ごろだとかという気持ちではなく、田老の生徒にとって本当の学びになるような、将来設計に生きるような、そして、自分の生き方や在り方に生かすことができるような活動を展開することです。

震災から学んだことを表現することも2学期の課題であることを1学期の終業式でお話しをしました。その中で、【風化が再び悲劇を生む】とすれば、田老一中の役割は大きい、とお話しをしました。その思いは、今でも変わりありません。

本校の役目を自覚し、思いを形にして実現する学期が到来したと思います。大震災から1年半を迎えようとしています。そして、来年の3月11日は3回忌にあたり、これからの活動の重要性が徐々に増してきました。2年生は、松園中学校で、震災関連の表現活動を計画していると聞いています。とても意義のある活動です。どうか、どのような時代にあっても【自分の命をしっかりと守ること、そして、他の人の命を支えることの

大切さ】を伝えてほしいし、【田老の未来の姿を語り、復興への夢を描いて】ほしいと思います。そして、すべての生徒には、命の大切さや復興へのねがいを、日本はもとより世界中の人たちに伝え、表現する活動を、この2学期、頑張ってもらいたいと思います。

具体的には、震災関連の表現活動の一環として、作文や写真や紙芝居などで表現する学習に、積極的に取り組んでほしいと思っています。

それらの活動は、10年後、20年後、君たちが、社会で先頭になって活躍するようになる時代に、また大震災が起こるかもしれないと危機感を感じるようになる時に、岩手や日本の復興のために、みんなで力を発揮しなければならない時に、きっと役立つからです。何かの誰かのために、きっと役に立つからです。そして、2学期に様々な形で予定されている総合的な学習の時間の中に、文化祭に、田老一中ならではの、震災学校ならではの表現活動を展開し、一人ひとりが、何かを誰かにしっかりと伝え考えてもらうため、数多くのメッセージを伝えてほしいと思います。」



写真6 作文集「いのち」(撮影:筆者)

これまで作文集「いのち」の作成、発刊に向けての経緯を記述したが、様々な立場の先生方からのご指導がなければ成し得なかった。そして、写真6の作文集を震災から2年目(三回忌)にあたる平成25年3月11日付けで、岩手大学地域防災研究センターから発刊していただいた。現在、作文集の一部は、東京書籍の道德の教科書「新しい道德2年」(「田老の生徒が伝えたもの」:山崎友子作)に取り上げられている。



### 4.3 いわての復興教育の推進

いわての復興教育とは、「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成するために、各学校の教育活動を通して、3つの教育的価値(いきる・かかわる・そなえる)を育てることです。」と定義されている。(いわての復興教育プログラム 第3版) いわての復興教育の目的は「人づくり」であることが理解できる。いくつかの岩手県内の諸学校における復興教育の様々な事例は「いわて震災津波アーカイブ」に掲載されているが、全ての教科・領域等で実施された優れた実践ばかりである。

#### 4.3.1 田老第一中学校の復興教育

平成24年度には、数多くの教育活動を展開した。年度当初の経営方針に、「キャリア教育：各学年の総合的な学習の時間の充実」という文言を加えたが、それは、田老の生徒一人一人に田老や岩手の復興や発展の担い手になってほしいとねがうからである。いわての復興教育の中核を成すねらいが人材育成であれば、キャリア教育を充実させなければならない。そして、復興教育に即したねがいやねらいを明確にしなから一つ一つの実践を大切に扱った。以下、経営方針内容に関連する4つの活動を紹介する。

#### 4.3.2 災害廃棄物破砕・選別作業見学

平成24年月9月18日に、1学年が、宮古地区(磯鶏)の災害廃棄物破砕・選別作業を見学した。写真7からは、真剣に見学する生徒の眼差しを見取ることができる。廃棄物選別作業で山積みされた品々は亡くなった人々の遺物であるかもしれない。子ども達にとっては、震災前に日常的に使っていた思い出の品々であるかもしれない。それらが、眼前で破砕され選別されている作業の現実を見て、生徒各々の胸に焼き付いたおもいは計り知れない。子ども達はいったい何を感じたのだろうか。作業見学を通し、震災の大きさはもちろんのこと、亡くなった人たちへの慰霊の気持ちを深くし、日常生活の大切さを改めて実感し、新たに田老と自分自身の将来を描いたのではないだろう

か。この見学は、復興教育の一つとして実施された優れた活動であると振り返ることができる。

復興教育推進上の大切な2つの視点を記述したい。1つ目は、本物を見せたり体験させたりすることの視点である。現実を直視させ、実感を伴う活動を実施したい。2つ目は、未来を描き前向きな意志を形成させるものでなければならない。この見学により、田老の生徒たちは、自ら復興に携わろうとする意志を形成し、未来に向かう力を育て高めることができたと確信する。9月は、作文集「いのち」の作成に向けて各生徒が作文をまとめる時期である。将来何をしなければならないのかを自覚し、そのために、今何をしなければならないかを自分なりに納得し本音で綴る素地ができたと思う。



写真7 災害廃棄物破砕・選別作業見学(撮影：筆者)

#### 4.3.3 交流活動「語り部」となって

平成24年度当初の生徒数は113名、その内就学援助を得ている生徒は68名(60.2%)、スクールバスを利用している生徒は93名(82.3%)に及んでいた。仮設住宅に住んでいる生徒は40名(35.4%)であった。また、親を震災で亡くした生徒も5名いる中、保護者の経済的な状況や生活現実の状況を理解しながらも前向きに学校生活を送っている。不登校生徒や別室登校の生徒は無い。しかし、人間関係や震災関連での悩みや心配事を常に抱えていた生徒もおり、心のケアを重視しなければならない状況下にあった。このような中であっても、生徒たちには、損壊した防浪堤や刻々と変わる町の現実を見ながら、未来への自分の姿を描き、可能性は小さくとも大きな夢を持ちながら前進してほしい、とねがった。また、数多くの教訓に学び、生きる力を身に付け、将来、岩手や

日本の復興のため様々な分野で活躍できる人間に育ってほしい、とねがった。

学校は昨年までは支援を受ける側としての立場であったが、平成24年度は、震災の記録と発信、田老の文化を形成する活動の推進を心に留め、内陸部にある中学校との横軸連携による交流活動においても同じ立場で堂々と且つ謙虚に自己表現できる生徒や集団に育ってほしいとねがった。

大きなねがいを形にする具体的な活動として、3年生修学旅行(4月10日からの3泊4日)を「返礼の行脚、学びの行脚、集団づくりの行脚」として実施した。旅行中、田老出身の山本英司先生(中野共立病院副院長)と友の会(中野共立病院が組織する健康・友だち・生きがいをづくりをすすめる団体)との交流会、田老漁協からいただいたお土産(真崎わかめ)渡しと校歌と応援歌の披露、UFJ銀行、ユネスコ、早稲田大学、橋本聖子議員(国会)、文教区立茗台中学校等への訪問等を実施した。そして、県内の横軸連携等により、多くの中学校との交流活動を実施した。盛岡市立米内中学校1年生との交流と震災関連講話(5月10日)、盛岡市立下橋中と城西中との部活動交流と震災関連講話(7月27日)、盛岡市立松園中学校との震災関連活動の交流(9月20日:田畑ヨシさんの紙芝居の朗読披露)、八幡平市立西根第一中学校との合唱交流活動(10月22日文化祭)等を行った。写真8は松園中学校での活動場面である。

復興教育では、前の通りの活動に戻すことではなく、新しい視点に立ち、質の高い教育活動にしようとする意識や願いが大切である。また、今までの活動が次の活動にどう影響を与え、繋がっていくかの視点を持ちながら、田老一中の復興教育を進めていきたい、と決意を新たにされた。



写真8 松園中学校で紙芝居「つなみ」朗読(撮影:筆者)

#### 4.3.4 宮古市立連合音楽会

平成24年11月14日に参加した市内連合音楽会も忘れることのない活動である。合唱曲は、田老の「未来」をテーマに生徒と教員と一緒に作詞作曲した。

「白い霧立ち込め 故郷を包む／白い雲 晴れるな／もっと もっと 町包め／(中略)／霧が晴れたなら／蘇(よみがえ)れ あの町……」  
「……守りの 堤せつなく／無常な自然の摂理／通り抜ける風に乗って／波が 波が／ささやいた」震災翌日の朝の風景、田老の町への復興、自然の猛威と防浪堤、生徒達は一語一語の歌詞を丁寧に、朗々と歌いあげた。

写真9にあるように、全生徒はTシャツを着用した。背中には「果てしなき大海原へ 我ら進まん あきらめず ひるまず 手をつなぎ 心をあわせ 未来への道作るべし」とプリントされている。絵柄全体のテーマは、「ボイジャー」である。田老出身の中野共立病院の山本英司先生からTシャツを贈っていただいたが、生徒会がシャツをデザインした際に、絵柄のテーマをボイジャー(voyager: 船出)と名付けたことに起因する。

合唱を終えた瞬間、会場からは大きな拍手が沸き起こった。「霧が晴れて元に戻ってほしい、本当にそんな気持ちです。」と感想を述べた生徒がいた。また、家を失い市内のアパートに移り住んだが、一緒に震災を乗り越えた仲間と離れたくないとして、遠距離通学している生徒は「この歌詞の意味をみんなに伝えたい」と話した。



写真9 Tシャツを着て歌う生徒達(撮影:筆者)

#### 4.3.5 震災資料展示室の設置

震災の記録にも力を注ぎ、田老第一中学校に震災資料展示室「ボイジャー」を設置した。作文集「いのち」の発行を平成25年3月11日と定め、その日を目標に開設を急いだのが「ボイジャー」である。特別教室一室を震災資料展示室に変えた。

田老第一中学校も国内外からたくさんの物心両面のご支援をいただいた。生徒にいきる力を与え続けた寄贈品は、復興教育の足跡、記録と記憶を残すこととしても価値があるものばかりである。

校長室に3月11日で終わっている日めくりカレンダーがあったが、額の作製を岩手大学に依頼した。そして、当時教育学部3年生の安倍詩織さんが、田中隆充教授の指導の下、木製の額を作製した。立派な額縁に入れられた日めくりカレンダーは、あの日の記憶を鮮明に浮かび上がらせる役割を持った。

その他に、新聞記事、田畑ヨシさん「つなみ」の絵本、大型写真、学校行事写真、各種スポーツ団体、個人からの寄贈品等を展示した。そして、あらゆるデジタルデータはパソコンに保存しプロジェクターで投影できるように機器も設置した。田老一中では、現在でも新入生を対象に、震災講話並びに当時の状況を学び未来を語る目的として震災資料展示室「ボイジャー」での学習を実施している。

## 5. 教員の資質の向上と防災教育

### 5.1 校長等の資質の向上に関する指標

これからの教育を向上させるためには、教員の資質向上と防災教育の更なる推進は必須である。岩手県教育委員会は、「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」（平成30年4月）を策定し、求められる教員像を7つの視点から明記している。

その一つは「復興教育」である。その具体的内容は、「東日本大震災津波の教訓を継承し、本県の地域・未来を担う人材を育成するなど、いわての復興教育を推進している。」とある。特に総合力の発揮期（48歳以上）にある教員は、「指導計画の立

案、校内体制の構築など、教育活動全体を通じた復興教育の具体的な推進に貢献している。」と明記してある。

しかし、管理職に求められる資質や能力はこれ以上のものが要求されるはずだ。例えば、未曾有の大地震が発生した時、火災や噴火、河川の氾濫等の自然災害時、生徒や教員への指示内容をどうするか。今、全ての管理職は、はたして命を守るための適切な指示が迅速にできるかどうか。有事の時、現場で発揮されるべき力量は、期待以上に要求される。そのために、ぜひ、管理職向けの研修を実施してほしい。研修内容としては、防災全般について正しい知識を得ること、地域社会を知り・交流すること、判断力、決断力、情報収集能力の育成、責任と覚悟をもって指示したり説明したりするための力の育成等多岐にわたる。

新しく赴任された先生方の各地域での研修会も実施することも欠かさずに実施すること。そして、地域、住民、各地域の自然災害の歴史を踏まえ、実態に合った防災についての正しい知識を得る。従って、目指す教員指標を実現する上で、またそれ以上の力量を身に付ける上で、体系的な研修の必要性がある。特に、校長等はあらゆることを常に備えておかなければならない。マニュアルを頭に入れておくことはもちろんではあるが、想定外のこともあること、その時どう動くのか、指示をするのかを常に考えていかなければならない。校長等は、学校周辺を歩きながら地域住民とも顔なじみになっていくことが大切である。日頃から、面と向かっての気軽な関係作りをしておくことがいざという時に役に立つということは、様々な事例が物語っているからだ。

### 5.2 防災教育の更なる推進

防災教育を充実させたい。それは、児童生徒が自分の命を守る力、家族等の命をも支え守る力を持ってほしいと心から願うからである。そのために、以下3点について提案する。

①各校は、教育課程の中に、毎年度、防災教育に関わる教育活動を盛り込むこと。係る学習指導の領域は多岐にわたるが、行事や総合的な学習



の時間等を活用し、教科横断的な取り組みを主軸とし全ての教育活動を深化統合して実施すること。また、年度当初の各校の防災教育の内容等を公表(マニフェスト化)するとともに、必要に応じて市教委等が内容を指導すること。

- ②3つの教育的な価値(いきる、かかわる、そなえる)を軸に、命そのものの尊厳、人とのかかわり、防災への備え等に係る教育活動を実践すること。また、毎年見直しを図りながら、教育活動を改善し、年度当初に全職員で共通理解を図ること。
- ③実践的な避難訓練を実施すること。年に何回かは地域住民と合同で実施すること。土日に実施する場合は授業日として実施すること。

## 6. 過去に学び、教訓を繋げる取り組み

これまで、過去の震災に学んできたのであろうか。これからは、風化防止のためにも過去の震災関連の優れた教訓や学びに立ち止まり、安易に通り過ぎてはならない。田老の防浪堤と田老津波誌に言及する。

### 6.1 「雨にもマケズ」等の壁画の価値

第1防浪堤から第3防浪堤の総延長2,433mの巨大防浪堤の内、第3防浪堤には22点の壁画が描かれていた。そして宮沢賢治さんの教えが生きていた。壁面は色鮮やかに描かれ、震災後も威風堂々と存在していた。長さ220m、高さ10m、総面積2,200㎡におよぶ長大な作品であった。我が国においても最大級の大きさであった。平成3年度から2年間にわたる研究事業として、旧田老町が、神奈川県的女子美術大学に委託し、平成4年8月26日に完成をみた。全ての壁画は、芸術的な色彩を帯びていた。田老産の石を砕き顔料として発色させた塗料を使用したからだ。目を引いたものは、写真10の「雨ニモマケズ」「風ニモマケズ」の壁画であった。宮沢賢治さんは明治29年に生まれ、昭和8年に亡くなっている。そして、それらの年に、三陸大津波が襲来している。壁画は、2つの大震災津波の歴史や教訓を決して忘れ

てはならないというメッセージを全世界に伝えるために存在していた。

今、震災の教訓を伝える建造物が持つ教育的価値、学術的価値を深く理解する必要がある。震災遺構として存在している建造物等は今後大きな価値を持つであろう。それは、学校や役場等の公共建造物、それらは永遠の記録の役割を持ち、記憶を隆起させ、秘めている教訓や学びを保持しているからだ。

田老の22点の壁画は、メッセージ性が高く教訓を伝える力が満ち溢れていた。しかし、海側に存在していた。仮に財源と再製作の意志があれば、国道45号線の道路側から見える位置に描き、新たな復興の象徴として世界に発信してほしい。



写真10 防浪堤にあった壁画(撮影:筆者)

### 6.2 田老村津波誌に学ぶ

地震と津波に関わる百科事典のような記録誌を紹介したい。

昭和9年3月3日に発刊された「田老津波誌」は優れた記録誌である。前述した荒谷アイさん(旧姓は牧野)をはじめとする当時の優れた児童作文が掲載されている。そればかりではない。

目次を見ると、本文は三篇から構成されており、田老村沿革にはじまり、地震と津波、避難状況、被害、慰問と救護、復興、津波の学術的調査、地震津波の心得等、昭和8年3月3日の大津波を多角的な視点でまとめている。

当時の田老尋常高等小学校の先生方が、震災後たった一年でまとめた力作であり一読に値する。あの日からの10年、教訓や学びを多くの媒体で記録され、人々の記憶を様々な形にようとしている活動が展開されている。しかし、田老津波誌のように昭和の初期に発刊された記録誌からも学び

得るものも数多くある。

時代は変化しても震災の教訓や学びは廃れることがない記録を今後とも大切にしたいところだ。

## 7. おわりに

あれから10年目を迎える今、教育は常に復興教育の原点に立ち戻らなければならないであろう。復興教育に向け田老一中が前進している最中、ある調査の数学の学年平均点が全県下で最下位であることを指導主事から知らされた。9月21日に復旧後の校舎に戻ったが、調査実施日の2か月前まで40名近い生徒が一つの教室で近隣の小学校に間借りしながら勉強していた。その学年は、ストレスで授業に落ち着きを欠き、生徒指導上の問題も起こしていたこともあった。そのような時期、様々な状況下にあった学校への平均点の情報は無用であったのではないか。学力向上一辺倒の教育からは未来を担う子ども達は育たない。

震災を経験した卒業生たちは、当時、ボランティア活動に身を投じ、怒りがこみ上げてきた時でも汚い言葉や行為で相手を傷つけることなく、良い人間関係を築き、生きて働く智慧を身に付け生きてきた。田老の子ども達は、現在、様々な分野で活躍をしている。作文集「いのち」の中で決意したように、岩手や日本の復興や発展に向けて努力している。

今、東日本大震災津波からの10年間及び2011年までの数年間を様々な視点から総括してみる時期ではないか。教育への課題要請ばかりが渦巻く風潮の中、教員の意識の格差も生じている。そのような中、教員や保護者は今どのようなおもいで子ども達を育てようとしているのか。あの日あの時から10年目を契機に、振り返り、これからの防災や教育の在り方、そして生き方等について整理してみる価値があるように思える。

## 謝辞

今回、東日本大震災について、「あの日、あの時」と題し執筆の機会を得て、心の整理ができたところです。また、防災教育等についての考えを

述べさせていただきました。田老一中の生徒達や先生方、関係各位の諸先生方に感謝を申し上げたいと思います。大変ありがとうございました。

(元宮古市立田老第一中学校校長)

## 注

### 1) 田老第一中学校と岩手大学との合同授業

授業は、震災6ヶ月前の2010年9月14日に実施され、山崎憲治先生(当時岩手大学教授)が主担当である岩手大学の共通教育科目(現在は一般教養科目)「津波の実際から防災を考える」という科目の現地実習であり、山崎友子教授は副担当であった。教育学部の学生の他、農学部・工学部、人文学部から25名が参加した。合同授業は、大学生がアシスタントとして数名が地域の学校の支援にでかけることはあるが、9月14日の津波体験紙芝居の合同授業が契機となり「異校種の合同授業」として、田老一中の生徒が岩手大学の学生と共に学び合うという極めて特色のある教育方法に成長した。また、震災後も多くの共に学ぶ場が共有され、「まず、講演、その後グループ・ワークで中学生のグループの司会役(ファシリテータ役)を大学生が務める」という合同授業の形が出来上がり現在に至っている。なお、荒谷栄子先生(当時、田老第三小中学校校長)のご自宅を訪問した際、荒谷アイさん(荒谷栄子先生のお母さま)、扇田チエさん、田中ミヤさん、扇田エイさんの4名(大正10年生まれの同級生で授業実施日当時90歳、昭和の三陸大津波を田老尋常小学校5年生の時に体験した)の方々から昭和の三陸大津波のことを拝聴した。

### 2) 田畑ヨシさん

宮古市田老町出身で、昭和三陸津波体験をもとに紙芝居(つなみ)を自作し、県内外の学校等で語り部として津波の恐怖を語り続け防災教育に貢献された。30年以上にわたる地道な啓発活動が評価され、海岸功労賞という全国的な賞を東日本大震災前に受賞された。

## 文献

- 岩手県教育委員会(2019)：『いわての復興教育』プログラム第3版』  
 佐々木弘平編(1934)：『田老津波誌』、田老尋常高等小學校  
 女子美術大学芸術学部(1992)：『田老町防潮提壁画「集い」について』、女子美術大学  
 山崎憲治、本田敏秋、山崎友子編(2014)：『3.11後の持続可能な社会をつくる実践学』、明石書店  
 山崎友子編(2013)：『いのち 宮古市立田老第一中学校津波体験作文集』、岩手大学地域防災研究センター

## **"That Day, That Time" and "The Future"**

SASAKI Rikiya

Keywords: Looking back on that day, School management, Reconstruction education, Records and memories, Aims and objectives

### **Abstract**

It has been almost 10 years since the Great East Japan Earthquake. At the time, I was the principal of Taro Daiichi Junior High School. I would like to look back on the situation of the school and students at that time, based on my memories and the various documents I recorded.

First, I will describe in detail the actions from the time of the earthquake until the evacuation to the Taro City Hall, the response from the next morning, and the dissolution of the teaching staff. I will also give special mention to the students who volunteered to carry relief supplies after the earthquake. In 2011, the school year began at Taro Daiichi Elementary School. Although the Taro Daiichi Junior High School was still in the midst of restoration, it was able to return to its junior high school building on September 21, 2011. This section describes the situation of the students from the time of the earthquake until they returned to school.

In the 2012 school year, I set up 11 school management policies and promoted a variety of educational activities with the aim of developing people who can contribute to the reconstruction and development of Taro and Iwate. Based on the school management policy, we promoted reconstruction education at Taro Daiichi Junior High School. The following are some of our practices:

1. Publication of a collection of student essays entitled "Inochi"
2. Observation of disaster waste shredding and sorting operations
3. "Storyteller" activities
4. Participating in the Miyako City Union Concert
5. Establishment of an exhibition room for disaster materials

In particular, thanks to the support and guidance of many people involved in the creation of the essay collection, we were able to publish it on March 11, 2013. Also the Earthquake Exhibition and Resource Room is used as a starting point for new students to learn about the disaster every year.

In order to improve education in the future, it is essential to further promote the quality of teachers and disaster prevention education. The following is a proposal for improving the quality of teachers and disaster prevention education. It is important to make efforts to connect the lessons and learnings from the disaster. I would like to describe the value of the 22 murals of the seawall and the Taro Tsunami Journal. Education that only improves academic performance will have no future. In the current trend of only requesting issues, there is a disparity in the awareness of teachers. In such a situation, what are teachers and parents thinking about raising their children? For the 10th anniversary since that day, it seems worthwhile to look back and consider the future of disaster prevention and education, as well as how to live.



資料

【資料1】

文部科学省文教科学委員会 6月9日 中学校説明資料

宮古市立田老第一中学校

校長 佐々木 力也

1 震災から現在までの状況



- (1) 3月11日(金) 東日本大震災
  - 14:46 6校時目の授業中「学活」(翌日は卒業式の予定)
  - 14:50 校庭に避難完了(在籍129名中7名欠席、122名確認) 情報得られず待機、余震もあることから15:30まで校庭で待機の指示
  - 15:10 田老湾方向に水柱(煙のように立つ噴水)を発見、「津波だ、逃げろ!」の指示で裏山へ避難(お寺のお墓を目指して避難) → 生徒の安否を確認(別ルートで避難した男子生徒があり、確認するまで1時間以上を要した)
  - 16:30 田老総合事務所の指示により、役場3階に避難し、その日は全員で宿泊(5人に1つの毛布3人に1つのおにぎり配給、夜中の余震続き、全員が棒状になって横になり、仮眠を取りながら一夜を過ごす)
- (2) 3月12日(土)
  - 早朝から 保護者に生徒の引き渡しを開始、欠席生徒7名も午後には無事であることを確認
  - 16:00 教職員解散(15日に集合することを指示) 田老総合事務所に残った者は、生徒約10名と校長・副校長
- (3) 3月24日(木) 高校合格通知書配布・卒業式(全校生徒出席、本校校舎3階集会室)
- (4) 4月1日(金) 職員会議(本年度の学校経営の基本方針を出す)
  - ・生徒や家庭の生活現実を十分に理解し、教育活動やPTA活動を行うこと。
  - ・田老や岩手の復興のため、明るい未来を展望し努力することができる生徒を育成すること。
- (5) 4月8日(金) 臨時登校日(新1年~3年) 心のケアに関わるアンケートの実施と個人面談の実施
- (6) 4月25日(月) 始業式・入学式(田老一小体育館)
- (7) 生徒数や学級数について
  - ・平成23年度生徒数 【6月9日現在】 ※ 生徒1名が豊間根中へ転校  
1学年44 + 2学年39 + 3学年46 + 特別支援学級2(3年在籍) = 131名
  - ・平成23年度学級数  
1学年2学級 + 2学年1学級 + 3学年2学級 + 特別支援1学級 = 6学級
  - ・家屋・保護者の被災状況について

	家屋の被災状況			保護者の被災状況	
	全壊	半壊	一部損壊	保護者の震災死	その他
1年	22	0	2	女子1名(父) 男子1名(母)	
2年	16	3	1	女子1名(母)	
3年	24	1	1	女子1名(母) 男子1名(父)	
全学	62:47%	4:3%	4:3%	孤児になった生徒有り	
・総計70名が家屋の被災者(53%) 内学区内移転者50名(内訳:避難所27、自宅以外の持家9、親戚11、アパート3) 学区外移転者16名(内訳:自宅以外の持家1、親戚8、アパート7)					

- (8) 教職員の被災状況
  - ① アパート・自宅住居を流された教職員4名(教員3・用務員1)
  - ② 避難所生活 1名(用務員)

2 防災教育について

- (1) 年2回の避難訓練
- (2) 田畑ヨシさん<sup>1)</sup>の「津波体験紙芝居(つなみ)」(子ども達に語り継ぐ津波体験)
  - ① ねらい
    - ・昭和8年の津波にまつわる講話(紙芝居・講話)を聞くことを通じて、地域に起こった歴史を振り返り、こ

ここに住む先人の不屈の精神と大きな郷土愛でこれを乗り越え、今日の礎となる奇跡に近い復興を成し遂げた田老町の住民の願いを理解させる。

・災禍を繰り返さないことと、必ずや襲うであろう津波に対し地域の一員として挑戦する勇気や心構えを持たせたい。

② 日時・会場 9月14日(火) 13:10～14:00 ……田老第一中学校体育館

(3) 学校報「潮騒」に記載した防災教育

【津波体験紙芝居(つなみ)を聞く】

岩手大と宮古市立田老一中合同の合同授業、津波体験紙芝居は9月14日に本校で行われた。2)田老地区に甚大な被害をもたらした1993年(昭和8)年の昭和三陸大津波の体験者が津波紙芝居や講話を拝聴し、若い世代が津波防災の大切さを実感した。吉村昭著「三陸海岸大津波」(中公文庫)を紹介したい。この著作は、大津波の惨状を様々な人々の証言をもとに再現した人間の姿を記録した作品である。中でも昭和八年の大津波の悲劇を当時尋常小学校六年の牧野アイさん(三中荒谷校長先生のお母様)の作文が感動を呼ぶ。(9月15日の岩手日報記事から一部抜粋)

(4) 今後の防災教育の在り方

割愛

### 3 震災加配の状況

割愛

## 【資料2】

「被災地における児童・生徒への被災体験の作文指導、その意義と留意点」

<意義>

1933年の昭和三陸大津波の犠牲は大変大きなものでした。孤児となった田老村の牧野アイさん(当時尋常小学校6年生、現在「荒谷」姓)の作文が、作家吉村昭の目にとり『三陸海岸大津波』の中に所収されることにより、津波の被害や被災者の思いが広く知られるようになりました。今回の震災後も多くの人々が再びこの本を買い求め、津波の悲惨さを知り、被災地にそれぞれがどのような支援ができるのか考えるヒントとなっています。

田老尋常小学校では、津波後、先生が児童に津波体験を書くように指導され、文集が出来上がりました。この教育的な活動には下記のように大きな意義があります。

- 1 被災者の視点から、記録を後世に残す。
- 2 津波防災の在り方を検討する研究資料となる。
- 3 被災した児童・生徒の心のケアとなる。
- 4 被災した児童・生徒を復興の方向へ導く一歩となる。
- 5 被災した学校の児童・生徒・教員の共感に基づく協力体制を作るもとなる。
- 6 被災地以外の被災しなかった人々が、津波被害の実相に近づくことができる。
- 7 自己の体験を文章にすることにより、また、さらにそれを公表することにより、自己の体験をそしてまた自身を対象化することができる。
- 8 対象化することにより、社会を変革する力を得ることができる。これは、復興の方向性やそのエネルギーのもととなる。
- 9 作文を書くという活動を通して、子どもと指導者との信頼関係が深まり、発表を通して、地域とのつながりが強まり、心理的に安定した気持ちを高めることができる。

牧野アイさんは、今90歳を超える年齢になられました。しかし、79年前の出来事は今でも鮮明だそうです。作文は、担任の先生からぶっさらばうに紙を渡されて書いたとのこと。最後の一文「私は、ほんとに独りぼっちの児になったのです」を書き終えると、担任の先生は抱き合っただけ涙を流してくださった、とおっしゃっています。

ご高齢の荒谷さんに担任の先生のお名前を伺うと、即座にフルネームで回答が返ってきます。「佐々木耕助先生です」と。担任の先生は、担当の児童が孤児となった現実を変えることはできません。これから訪れる厳しい未来に向き合うきっかけを作り、歩き出す勇気を与えようとしたのだと思います。その思いは伝わりました。

震災後田老を離れて親戚の家から学校に通った牧野アイさんは、中学校を終えると田老に単身戻りました。理由は「友達がいるから」とのこと。その尋常小学校の同級生と震災前まで毎日自宅で「同窓会」を開いておられました。同窓生のみなさん、震災後、同窓会の再開を心待ちにしておられるそうです。このように、震災後、先生方が子ども達とともに現実と向き合おうとされたこと、しかも、学校として取り組まれたことは、子ども達の心の支えとなり、その後の人生を歩む力を生み出しました。

被災体験の作文指導を学校が行うことは、このように一人ひとりの子どもの心に寄り添うことであり、そのことにより先生と子ども達で学校を作っていくことであり、また、その結果、町の復興が成し遂げられ、一人ひとりの人生が確固たるものとなるという大きな意義を持つものです。そしてまた、津波防災という社会全体の課題に対して貴重な資料を提供してくれます。

<心理学の知見から>

心理学では、「内言」と「外言」という概念で人の思考が言語として表現される過程を説明します。対人的コミュニケーションに使われていたことばは「内言」になることにより、思考が深まります。そして、言語という表現形式を得て、思考を「外言」として表現することができるようになります(ピアジェ、ウィゴツキー)。

岩手大学教授 山崎友子

# 災害時心のケア報道ガイドラインの作成に向けて

黒田大介

## 要 旨

災害時心のケアの必要性は、阪神大震災以来、広く知られるようになった。心のケア報道が被災者の心の復興に寄与している半面、マスコミのメンタルヘルスに対する認識不足などから、東日本大震災被災地では報道被害が数多く見られたことも事実だ。不適切な報道は、被災者の心の回復を阻害しかねない。報道被害の事例収集を進め、災害後の心的経過に応じた適切な報道の在り方を考えていく必要がある。一つの試みとして、WHOの自殺報道ガイドラインなどを参考に「災害時心のケア報道ガイドライン」のたたき台を示すとともに、被災者との対話に根差したガイドラインの作成プロセスも展望したい。

キーワード：災害時心のケア、心のケア報道、報道被害、心のケア報道ガイドライン、被災者との対話

## 1. 心のケアと心のケア報道

### 1.1 災害時心のケア

日本における災害時心のケアは、1995年の阪神大震災を機に広く必要性が認識されるようになった。被災した精神科医療機関の救護活動を皮切りに、トラウマ(心的外傷)やPTSD(心的外傷後ストレス障害)の概念や治療法が米国などから導入され、試行錯誤が重ねられた。その経験と教訓を踏まえ、精神科医、看護師、臨床心理士など多職種で編成された「こころのケアチーム」が発足。2004年の新潟県中越地震の際には、全国から応援に駆け付けたこころのケアチームを都道府県レベルで取りまとめて必要な地域に派遣し、その情報を集約して被災者の継続的なケアにつながるシステムが動き出した。このシステムが大々的に展開されたのが東日本大震災津波だった。

ただ、東日本大震災の際も、東京電力福島第1原発事故で広域避難を余儀なくされた精神科病院の入院患者らの対応に大きな課題を残したことを踏まえ、こころのケアチームを強化するかたちで新たに「DPAT(災害派遣精神医療チーム)」が発足し、熊本地震被災地などで活動している。

こころのケアチーム(=DPAT)の活動内容は、災害後の時間の経過に伴って変わっていく。直後の活動は、被災した精神科医療機関の復旧支援

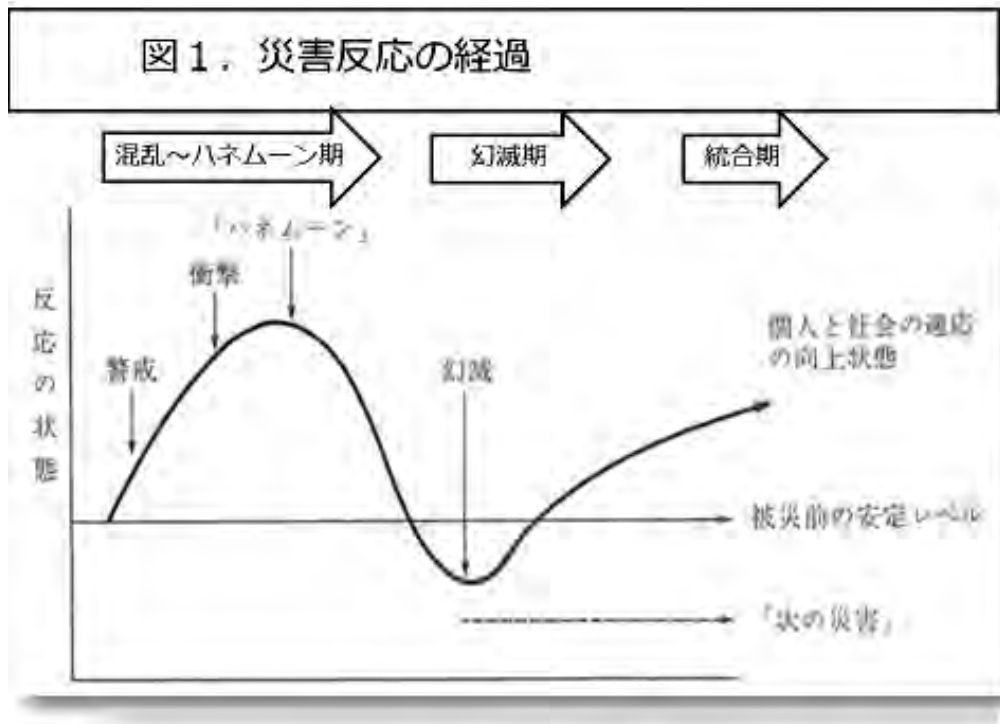
や、通院・入院していた精神障害者の服薬継続など。その後、避難所の巡回訪問などを通じ、被災者の心身の不調への対応にウエートを置いていく。

心のケア活動は、広義と狭義に分けられる。「心のケア=PTSDの治療」というイメージは依然として根強いが、これは狭義の心のケア、すなわち、全体のごく一部にすぎない。

広義の心のケアとは、被災し疲れている人が心身を休める場ができる、温かい物が食べられる、仮設住宅ができて生活が安定するなど、生活環境を良くして、少しでも安心や安全を提供し、回復できる人の回復を促進すること。要するに、ごく一般的な被災者支援だ。恐ろしい体験の記憶がよみがえったり、眠れなくなるなど、いわゆるPTSDのような症状は、多くの人の場合、生活が安定してくれば時間の経過と共に自然回復していく。そして、それだけでは足りない人に対して、精神医療の専門家が提供していくのが、狭義の心のケアだ。PTSDに特化した精神療法や、薬物療法などからなる。

災害後の心的経過については災害精神医学の古典的名著、ビヴァリー・ラファエル『災害の襲うとき』所収の「災害反応の経過」=図1(一部改変)=が有名だ。その後、災害時メンタルヘルス研究の蓄積に伴い、「混乱期(茫然自失期)」「ハネムー





ン期」「幻滅期」「統合期（復興期）」の概ね4段階で説明されるようになってきた。

災害発生直後の衝撃さめやらぬ「混乱期」を経て、精神的に高揚し被災者の連帯感が強まる「ハネムーン期」が訪れ、心の反応の曲線はピークに達する。その後、将来不安や疲労の蓄積が心身の不調となって現れる「幻滅期」となり、心の反応の曲線は落ち込む。そして、少しずつ個々の生活再建や地域の復興へと歩み始め、心の状態も回復していく段階が「統合期」と呼ばれる。

広義／狭義の比重で言えば、広義の心のケアがあってこそ狭義の心のケア。生活再建の土台が揺らいでいる限り、心の回復は進まない。例えば、発生直後の「混乱期」や「ハネムーン期」に被災者が不眠や過覚醒を訴えたとしても、必要なのは安心して眠れるような避難所環境の整備などであって、PTSDなどの診断名を付けるのは早計だ。「幻滅期」に際しても、最も重要なのは生活再建支援となる。その上でなお心の不調が長引く人、いつまでも幻滅期にとどまり、統合期に向かって心が上向いていかない人は、メンタルヘルスの専門家に適切につなげていく。要は、被災者を過度に病理化してはならないということだ。

## 1.2 災害時心のケア報道

心のケア報道についても、広義と狭義に分けて考えることができる。そして、心のケアと同様、広義の心のケア報道こそ重要となる。

### 1.2.1 広義の心のケア報道

広義の心のケア報道の根幹は、正確な情報発信に他ならない。筆者が震災から数日後に被災地を訪れた際、避難所の体育館に届けられた新聞を、避難者が順番に食い入るように見ていた光景が鮮やかに思い起こされる。とりわけ災害直後の混乱状態では、被災状況がどうなっているのか、電気はいつ付くのか、支援物資はいつ届くのか、仕事に向かった家族は無事なのか…など、分からないことだらけだ。福島原発事故に伴う放射線の健康被害などについてデマも飛び交っただけに、なおのこと正しい情報が不安解消に欠かせない。

中長期的な広義の心のケア報道とは、被災地の様子を継続的に報じ続けること。ラファエル(1989,20p)の「災害の報道が新聞のフロント・ページから消えるころ、幻滅的な現実直視の局面が現れる」との言葉は示唆的だ。災害から時が過ぎるに従って、復旧復興が道半ばであるにもかかわらず